



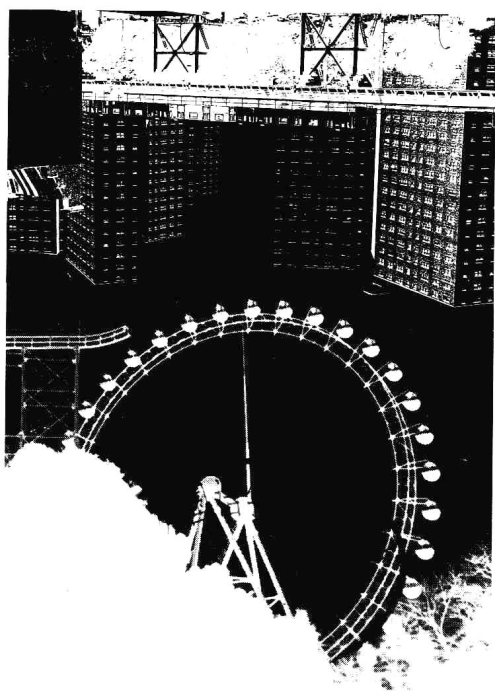
ロココ町

Rococo-cho

島田雅彦

SHIMADA MASAHIKO

口口口町



島田雅彦

集英社

ロココ町 ろここまち

一九九〇年七月一〇日 第一刷発行

著 者 島田雅彦 しまだ まさひこ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社英社

〇二五〇 東京都千代田区一ツ橋一五一一〇

編集部 (〇三) 二三〇一六二〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1990 M.Simada, Printed in Japan
ISBN4-08-772749-1 C0093

目次

目次

1 迷子の探偵 7

2 遊園地の進化論 56

3 情報屋 80

4 ギルガメ師はこう語った 118

5 SORAMIMI 152

6 闇からの帰還 175

7 ヴィーナスの軍隊 195

8 可能世界への移住 218

エピローグ 242

裝
幀

是
枝

開

口口口口

1 迷子の探偵

生活費をぎりぎりまで節約し、月に一日しか働かない勤勉な怠け者のB君は、ぼくたち社交仲間の一人だったが、最近、全然姿を見せなくなった。ある人は「ただ酒をせびる自分の浅ましさに愛想をつかしたんだ」といい、別の人は「このあいだおれはあいつにキャバレーのホステスを紹介してやったんだ。きっと、ヒモとして雇われて家事に忙しいんだよ」といった。ぼくはその二人よりもB君に対しては冷淡だった。

「栄養失調で死んだか、発狂して精神科病棟の住人になつてゐるのさ」

月に一度の彼の仕事というのはぼくたちには到底、真似のできない、高度のテクニクと閃きを必要とするものだった。複雑なコンピュータープログラムのミスを発見し、修正する作業……普通なら一週間かかりそうなところを彼は一日でやってしまうのだった。報酬は一人暮らしの生活を支えるには充分過ぎるほどあったはずだが、彼はその報酬を得体の知

れない研究に費やし、そのおこぼれで衣食住を支えていた。もつとも、彼はコンピュータと心中するようなマニアではなく、薄暗い部屋で思索にふける時代錯誤の哲学者めいたところがあった。といっても、眉間に観念論の皺が刻まれたような深刻な表情とは程遠く、ラピュータの住人のようにいつもうわの空でだらしなく口を開けていた。その表情は衣食住に無頓着な彼にピッタリだと誰もが思っていた。

ぼくたちは彼の白昼夢そのものの顔と生活態度を愛し、衣食の面での援助を惜しまなかった。その代わり、彼はぼくたちのストレス解消役に甘んじ、面と向かって浴びせられる揶揄嘲弄に耐える必要があった。

ぼくたちは彼のキャラクターをネタにその場で思いついた偏執狂的冗談を披露し合う。

例えば、

「君は放っておくと、ミイラになっちまうんじゃないか？」とか、

「国民がみんな君みたいな節約主義者だったら、日本経済は破滅だな。みかんやたまねぎばかりじゃなく、あらゆる過剰生産物が至るところに捨てられて、日本全国が夢の島になるだろうな。捨てられているのはみんな新品だから、我々はそれを拾って使えばいいのさ。超福祉国家の誕生ってわけだ」

「君はその節約主義を新興宗教に発展させたらどうだい。年寄りや主婦の皆さんの中には

節約を美德と考えている人が意外に多いから、成功するぞ。大企業の一つや二つ簡単に倒産させられるさ」などと。

この秘教的愉楽は何度も繰り返すうちにインフレを起こし、習慣化してしまう。先月、誰かが口にした冗談を今月になってまた、その当人が口にするかもしれない。だが、誰もこの儀式をやめない。はたから見れば、何の得にもならない自堕落なゲームと映るだろう。三十を過ぎ、B君以外は妻帯者であるぼくたちが周囲の客を辟易させる下品な笑い声をあげ、互いに無批判に、倒錯したゲームに興じているありさまを目撃した見ず知らずの中年紳士はこんなことをいった。

「友達をバカにして何が楽しいのかね。お人好しにつけ込んでいると、あとで手痛い目に合うかも知れんよ」

いや、B君はバカにされているとは思っていないかったし、ぼくたちは彼を何処にでも転がっているお人好しとは思っていないかった。実をいうと、ぼくたちはB君の思考回路の複雑さに畏敬の念すら抱いていたのだ。それを隠すためにもっぱら自己満足のゲームにいそしんでいたわけなのである。きつとB君は沈黙と屈託のない笑顔でもっと手ひどくぼくたちをバカにしていたに違いない。

B君とぼくたち社交仲間は五年前までPM大学のメディア研究会に所属していた。一言でいえば、テレビとかビデオ、コンピューター、電話、演劇、映画、文学まで様々なジャンルのメディアの機能や用途の研究、サイバネティックスやメディア論の理解を深めることなどを目的とする、ビギナーに苔が生えた程度の学習サークルだった。メディア研に集まったぼくたち六人の肩書きはまちまちで、T君は映画雑誌の編集をするかたわら、カルトムーヴィーの発掘を見返りもなく続けていた。R君はテレビ局の新米ディレクターで、テレビゲームの名人、K君は「電話の受話器を耳に埋め込みたい」とまで語る電話中毒で、N T Tの宣伝部に勤務し、電話を現代人のコミュニケーションの唯一の媒体にしようという、理想とも出来の悪い宣伝コピーともつかぬことをヒステリックに主張し、ついには『電話男』といういびつな現代文学まで執筆した男だ。P君は自分の見た夢を小説や演劇で再現することに情熱を燃やしていたが、女にだらしなく、実生活で悪夢ばかり味わっていた男。そのせいか、小説家としてそこそこ成功していた。そして、ぼくとB君はPM大学の院生だった。ぼくは比較文化化学研究科で主に異文化コミュニケーションの歴史を専門領域にし、彼は理学部の情報学研究科で、特に専門領域を持つというのではなく、従来の学問分野からはみ出たところで独自の研究をすすめていた。

「ぼくのやっていることはアカデミズムの世界から村八分にされてるんだ。そんなことはどうでもいいんだ。学問体系なんてみんな排除の体系だよ。見て見ぬふりがアカデミズムの信条なんだからね。別にぼくは大学教授という職業に憧れているわけじゃないんだ」

B君自らこう語ってもいた。

B君はぼくたちメディア研の中では最もラディカルな情報理論を考えていた、と思う。実のところ、何を考えていたのかぼくたちは理解しようとしなかったし、彼の方も自分の理論の説明を億劫がっていた。彼は自分の理論が生半可に理解されることを拒み通した。彼にとつては、ぼくたちも見て見ぬふりが得意なアカデミズムのお城の召使いだっただのかも知れない。

他人を理解するというのは、他人のいうことを自分の思考回路で翻訳することにはほかならない。だから、理解しようとする人の思考回路の盲点をつく言葉や行動は網の目からポロポロ落ちてしまいか、壁にぶち当たってはね返ってしまふものだ。結局、ぼくたちはB君の理論の中でも最も凡庸な部分しか理解できない。バカの壁は陰しくぶ厚いのだ。早トチリのK君はB君の話を聴くと、すかさずこういうのだった。

「ああ、それならおまえはおれと同じことを考えていたんじゃないか」

B君はたった一言、結びの文句をいう。

「もういいんだよ」

五年後の現在、ぼくたちの誰もが大した理由もなく生命力を低下させていた。泥水同然の脳味噌をお互いにかき混ぜ合いながら酒を飲むのが旧メディア研究会の主たる活動となつた。

TもRもKも雄カマキリのように妻の絶対王政の下でビクビクしながら、五年前と同じ仕事を続けていた。ぼくはマスターコースを修了したあと、予備校の英語教師になった。関西の大学のアジア地域研究所助手というポストを獲得していたのだが、すでにぼくは学門よりお金の誘惑に駆られていた。フィールドワークやら文献の管理より、年収二千万円の方を選ぶ正直さをぼくは失っていなかったのだ。さらに、わがままを使いこなすだけの才能も持っていなかった。

ぼくはB君の数倍は他人の都合に自分を合わせている。ぼくにはそういう生活形態がうってつけなのだ。要するになまけものというわけだ。まあ、自らこう定義するのも自嘲半分、快樂半分なのだ。

サラリーマンは自嘲によってプライドを守り、プライドを一時的に捨ててサラリーマン

に徹することで快楽を生産する精巧なマシンだ。ぼくはこのシステムだけはうまく使ひこなす自信がある。いや、これも負け惜しみか。

ぼくが自慢できるものといったら、人より二年分多い学歴と一・五倍くらい多い収入くらいなものだ。学歴の方は役に立っていないし、収入の方も減りつつあって、自慢できるのもあと二三年だろう。去年までは、予備校の教え子と結婚したことを自慢できた。ジョン・テニエルが描いた不思議の国のアリスを成長させて、ブレイメイトにしたように一般受けする美人だった彼女を我物にした時は、この世の「ワンダー・ランド」に住まう心地だった。同情をそそる垂れ気味の目とそれとは裏腹に挑発的な尖がった乳房、そして何よりも十九歳という若さ！ ぼくは吸血鬼になった気がした。プレイボーイの美貌と巧妙な口舌など必要ない。予備校教師の役得というものだ。浪人という逆境を支える励ましといくらかの小遣いをプラスすれば、予備校のアリスは容易に吸血鬼になびくものだ。

ところで、アリスは持ち前の好奇心と楽天的性格が災いして、後年出会う男たちにとごとくたぶらかされ、晩年は不思議の国や鏡の国の冒険の楽しい思い出と現実の区別がつかなくなり、精神病院で意味不明の詩（もとより彼女には現代詩を書いているという意識はなかった）を書きつづり、寂しく死んでいったという。S君の説によれば。

だが、予備校のアリスは顔に似合わず、世知に長けていた。ぼくとの結婚は綿密な計算

に基づいての行動だった。結婚してしまえば、志望大学合格という七面倒臭い目標をなしくずしにして、楽に合格できる大学に入学し、夫から小遣いをせびって遊びほうけていられると踏んだに違いない。東京には吸血鬼の血を吸うアリスがいるから気をつけ給え、プレイボーイ、サラリーマン、その他自称吸血鬼諸君！

今、ぼくは英語教師としてかつての人氣はなく、猥談が得意な新参の教師に生徒を奪われたし、入試の問題の予想も見事にはずれたから、年収の三十パーセント減は覚悟しなくてはなるまい。そのうえ、免許取り立ての妻がタクシーと接触事故を起こしたり、受講生を増やそうと毎週、生徒たちをビザハウスで接待したり、憂さ晴らしにキャバレーに出かけたりで、出費はかさむ一方だった。

この悪循環そのものの生活を清算しようなどとは思わないくらいぼくは慎重である。下手に清算するより愚痴の方が安全だ。金遣いが荒く、三ヶ月に一度、いやいやぼくとのセックスに応じ、子供も欲しがらない妻……「愛のない夫婦生活より愛を高め合う不倫の方が正しい。あなたは今こそ自分の知らない自分に気づく時だ」とか何とか書いてある、高名なカトリック作家の手になる恋愛指南書に熱中して、男狩りをする妻……妻の帰りを待ち侘びる真夜中、多額の保険金をかけて殺してやろうと何度思ったことか。しかし計画を立てるやいなや、妻が気の毒になり、ついでに彼女の遊び癖まで許してしまう。実に都合